**資料１―１**

女性に対する暴力専門調査会

# 性暴力被害を相談しやすい体制へ向けたメディア戦略

（２０１１年９月１２日　ジャーナリスト・和光大　竹信三恵子）

## １．パープルダイヤル急性期暴力被害への相談の壁

**（「女のスペースおん」「日本フェミニストカウンセリング学会」「ウィメンズセンター・大阪」のメンバーへの聞き取りから）**

・性暴力とは何かについてのメディア側の認識の不足。パープルダイヤルの広報も、画期的な取り組みの割にはマスメディア行き届かなかった。

・テレビで相談を広報した時、「性暴力」でなく「犯罪被害」などの言葉を使っているため、自分に関係があると理解できない。

・ＤＶについて「無視」という言葉に反応して相談してきた人が目立ったが、こうした枠組みでは、急性期の性暴力被害については掘り起こされにくい。

・安全の確保が必要とされる中で相談拠点をどう広報するか

・地域に根差した拠点が少ないので相談をうけてもつなぎにくい。

## ２．マスメディアはなぜ性暴力について広報しにくいのか（大手紙記者の聞き取りから）

・部数が大きく影響力が大きいので、センシティブな問題を扱う時に手が縮む。

・性暴力とどう向き合っていいかわからない

→書きたい放題を書いて被害者を傷つけるパターン

→まずいことを書いてしまって問題になると困るので、あまり書かないパターン

・相談を受け付けると書いても大丈夫なのか、という記者の側の不安

→「ＤＶの相談に来てほしいと警察はアピールしているが、二次被害にあう恐れはないのか」「ＤＶの駆け込み場所を掲載して夫が捜しに来る恐れはないのか」

・パープルダイヤルという企画そのものを知らなかったり、意味づけがわからなかったりする記者も＝政府の広報体制の問題点

## ３．性暴力被害相談情報を被害者に届けるために

**【テクニカルな問題】**

・被害者に届く用語使いの工夫→「犯罪被害」などの迂遠な呼びかけでは、当事者は何のことを言っているのかわからない

・信頼できる口コミメディアの活用（新聞もテレビも見ない世代）：若い世代向けのカードや鉛筆など身近なグッズの配布／学校との連携／携帯メールの活用の工夫

・政府の広報体制の再点検：担当記者クラブが熱心でないとき、関心のある記者リストを

もとに広報する必要も（ＮＧＯの同席など生の声の導入も）。

**【大枠の問題】**

・受け皿の整備（韓国や米国などにみられるワンストップサービスなど）→「警察にいきなりつながれるのはこわい」（相談者）、「自信を持って記事にできる受け皿整備を」（マスメディア）

・マスメディア向け性暴力被害報道のためのガイドブックの作成と配布、各マスメディアの用語担当部署との連携

→被害者への直接取材はなぜ難しいのか

→直接取材をしなくてもいい記事を書くためのヒント

→実名報道と匿名報道

→性暴力用語の適切な使用法

など。

参考：セルビアのＮＧＯの人身取引報道ガイドブック

【目次】

総論

人身取引とは何か／人身取引の被害女性：不法移民と売買春／人身取引の原因／被害者の実像／人身取引被害女性への偏見

セルビアの人身取引の実態

中継地・受け入れ国セルビア／送り出し国としてのセルビア／ホットラインに寄せられた相談件数と内容統計／セルビアの法制度／セルビアでの子どもの人身取引

女性の人身取引とメディア

なぜメディアを調査するのか／問題の定義／調査方法（２４０の記事調査）／時期別・テーマ別の記事の量的調査／問題解決に役立つ記事、マイナスになる記事の比較／ジャーナリストも間違いを起こしうる（意図がよくても結果がマイナスな場合とはどんな場合か）／間違いを防ぐために／被害者は理解されるべきであって、同情されるべきではない／黄金のルール（攻撃的になるな、聴くことを学べ）／経済などの社会構造から分析せよ／警察情報だけに頼るな（被害者女性を犯罪者扱い）

被害者へのインタビューの仕方

被害者の心の傷を記事より大切に／言葉にならない言葉に注意／周囲の支援者の情報も大切……など。